

成果報告書

2016年度助成	所属機関	座間市立栗原小学校	
役職 代表者名	校長 直井 恵子	役職 報告者名	教諭 高山 文輝
タイトル	自分らしさを生かして表現できる子 ～自分の考えをもち、思考を深める言語活動を通して～		

※ご異動等で現職の方では成果発表が難しい場合、上記代表者または報告者による代理発表を可といたします

1. 実践の目的（テーマ設定の背景を含む）

本校の児童の様子や実態として自分の考えを相手に話したり説明したりすることが苦手な児童や、話を聴くときに反応することが乏しい児童が多いことが挙げられる。そこで平成26年度より、まず、表現するためには「安心して表現できる学習環境を整えていく」必要があることから、低・中・高学年で系統立てた、「あたたかい聴き方」・「やさしい話し方」の指標を設定し、「聴く」・「話す」の基本的な姿勢に取り組んだ。

次年度からは考える力を育てていく必要性や自分らしさを生かして表現するための具体的な手立てを考え、実践していくことにより、さらにテーマに迫ることができると考え、サブテーマを「自分の考えをもち、思考を深める言語活動を通して」とし、取り組みを進めていくことにした。さらに研究を深めるため、書く活動と振り返りの充実を図り、様々な教科・領域において各学年が工夫を凝らして多様な取り組みを行ってきた。そのような取り組みを一層充実させ、理科教育でも実践していこうと考えた。

特に理科教育では、実感を伴った理解を図っていくことで、科学的なものの見方や考え方を育み、自分らしさを生かして表現できるようになると考えるので ICT 機器等を活用して研究を深めていきたい。

2. 実践にあたっての準備（機器・材料の購入、協力機関等との打合せを含む）

○ICT の活用

大型テレビ、タブレット端末、書画カメラ、デジタルカメラの購入
教員による購入教具の活用研修

○講師との連携

スーパーバイザーとして横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター主任研究員の山本金五先生にご指導いただく

○授業実践

校内研究、参観授業で発表

3. 実践の内容

「自分らしさを生かして表現できる子」をテーマとし、理科教育でも研究を深めた。理科においては、とりわけ実感を伴った理解を図っていくことで、科学的なものの見方や考え方を育ていき、自分らしさを生かして表現できるようになると考えた。そのためにも教材・教具を充実させ、ICT機器を効果的に活用することが理解の深まりへとつながった。

具体的な授業実践は以下のとおりである。

第3学年1組

1. 単元名 「風とゴムのはたらき」

2. 単元目標

風やゴムで物が動く様子を調べ、風やゴムの働きについての考えをもつことができるようにする。

3. 本時の目標 様々な材料を用いて、さらに距離をのぼすため帆を工夫した帆かけ車を考える。

4. 思考を深める手立て

○発表でタブレットを使用し、理解を深めさせる。

○様々な材料を使用し、実験場所を確保することで試行錯誤できるようにする。

5. 本時の流れ

① 前時から、風の働きについて確認する。

② 様々な材料を用いて、帆を工夫する。(ひとり学習)

③ 友達の工夫した帆も参考にする。(みんな学び)

④ 自分の工夫したところと友達の参考にしたところを発表する。(みんな学び)

⑤ 振り返り

*②～④の活動をタブレットからテレビに映し出し紹介

第4学年1組

1. 単元名 「体のつくりと運動」

2. 単元目標

人の体のつくりと運動とのかかわりについての考えをもつことができるようにする。

3. 本時の目標 体の曲がる部分を調べることに意欲的に取り組む。

4. 思考を深める手立て

○ICTを活用して意欲的に調べることができるようにする。

5. 本時の流れ

① 前時を振り返り、体の曲がる部分を確認する。

② 体の曲がる部分にシールを貼る。(ひとり学習)

③ 体のつくりについて考え、気づいたことを発表する。(みんな学び)

④ 振り返り

*②～③の活動をタブレットからテレビに映し出し紹介

*発表では書画カメラ使用

4. 実践の成果と成果の測定方法

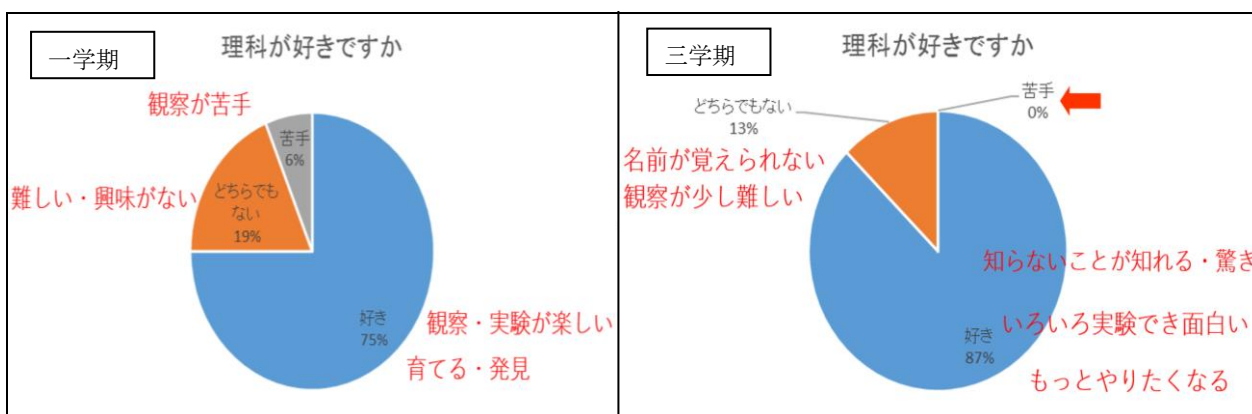
○授業実践

見通しをもって問題解決に取り組み、自分らしさを表現できるよう、ICT機器を使って、3年生「風やゴムのはたらき」、4年生「体のつくりと運動」で授業を行った。「風やゴムのはたらき」では、風の性質を利用し、さまざまな材料を使用して帆かけ車を遠くまで進ませるためにはどのようにしたらよいか考える授業を展開した。「体のつくりと運動」では、人の体のつくりと運動とのかかわりについての考えをもつことができるよう友達の意見や生活経験をもとに学び合った。授業では①学習の見通しをもつ②一人で学ぶ③みんなで学ぶ④振り返りを軸とし、ICT機器を有効に活用することをこころがけた。



予想、実験、考察の形を軸に、児童自身で様々な実験を行い、タブレット端末を用いて、より詳しく観察・調査したりすることでさらに実感を伴った理解を図ることができた。また、生活体験から考える課題の見通しや考えを交流する相談タイムを取り入れる事でより一層児童の考えの深まりが見られた。タブレット端末からテレビに実験の様子やノートを映し出すことで発表することが苦手な児童にとって気軽に自分の考えを話したり、分からないとつぶやいたりしやすくなり、思考・表現の深まりへとつながった。「風やゴムのはたらき」では、自分が作った帆かけ車と友達が作った帆かけ車の違いを比べ、「体のつくりと運動」では、関節を拡大することで体のつくりについてじっくり観察することができた。児童からでてくる気づきを大切にしながら授業を行うことができた。

○アンケートから



これらの授業実践を通して、児童の理科学習に対する意識調査を行った。年度初めは、観察や実験に苦手意識をもつ児童も見られたが、年度終わりには ICT 機器を活用した授業なども通して苦手と回答する児童は見られなくなった。

5. 今後の展開（成果活用の視点、残された課題への対応、実践への発展性など）

○成果活用の視点

学習の見通し、ひとり学習、みんな学び、振り返りの学習形態をもとに ICT 機器の活用を取り入れることで物事に対する気づきが増え、意見交換も活発になった。また、テレビに映し出すことで、しっかりと意見を聞くとともに話すことができるようになった。今後は、理科の他の単元や他の学年においても ICT 機器を効果的に使った実践を心がけていきたい。

○残された課題への対応、実践への発展性

観察や実験を通して、関心や意欲の高まりが見られたが身につけた知識や技能を活用していく場面が少ないので活用場面の機会を設け、生活と結びつけていきたい。また、児童の身近な具体物などを用意し興味をもてる環境整備を行っていく。

6. 成果の公表や発信に関する取組み

※ メディアなどに掲載、放送された場合は、ご記載ください

○神奈川県小学校理科教育研究大会において授業提案

○座間市理科部研究会において紹介

7. 所感

本校では、研究テーマに迫るため共通の学びである①学習の見通し②一人で学ぶ③みんなて学ぶ④振り返りを軸に児童の発達や実態に応じた指導を行ってきた。理科教育はこれまで専科の教員が指導することが多かったが日産財団からの助成を機に担任が理科教育を行うことができた。それ故、専科の教員から助言をもらうことも増え、学年間で話し合ったり教材の研究を行ったりする機会も多くなった。授業実践することで購入した ICT 機器をただ使用するのではなく、授業展開において「いつ」「どのように」使うことが効果的であるのか学ぶこともできた。児童の「なぜ」「どうして」という疑問点を児童が主体となり、学び合い、対話することで深い学びへとつながっていった。しかしながら、ICT 機器の利便性はまだまだ残されているので、今回の助成から得たものをさらに向上させられるよう、今後も理科教育・他教科において役立てていきたい。